人類に奉仕するロータリー
RI会長　会長ジョン・ジャーム

Rotary District 2640 Japan
海南東ロータリークラブ
ROTARY CLUB OF KAINAN EAST
2016-2017年
会長　上野山 雅也　　幹事　山畑 弥生　　SAA：大江 久夫

第 1900 回例会
平成 28 年 12 月 19 日（月）

12:30～ 海南商工会議所 4F

1．開会点鐘
2．ロータリーソング　「それでこそロータリー」
3．ゲスト紹介　高石 RC　坂東　剛 様
4．出席報告
会員総数 45 名　　出席者数 24 名
出席義務規定適用免除会員　1 名
出席率　54.55%　　前回修正出席率　54.55%

5．会長スピーチ　会長　上野山 雅也 君

皆様、こんにちは。いよいよ年末も押し詰まってまいりまして、何かとお忙しいことと存じます。あと少し踏ん張って頂きたいと思います。

米山奨学生のクリスマスパーティに坂口さん引率ご苦労様でした。大変盛り上がったとのことでよかったと思います。

気付けば、本年最後の例会となり、そして記念すべき 1900 回目の節目の例会になります。これも先輩諸氏の長年の功績であり敬意を評したいと思います。

さて、本日は、ゲスト卓話として高石ＲＣの坂東様をお招きしております。「私の想う 2640 地区」という題目でスピーチお願いできるとのことで大変興味深くまた楽しみしております。後程よろしくお願いいたします。

先日、恒例のノーベル賞の授賞式があり、わが国からは、医学・生理学賞に大隅良典、東京工業大学教授が栄誉に輝いたところであります。「細胞が、どうやって組織を再利用し、病気を防ぐのかという長年の疑問を解き明かすための突破口となる（オートファジー）の研究」が評価されたとのことです。一方、文学賞に選ばれたアメリカのシンガー・ソングライターのボブ・ディランは授賞式を欠席しメダルの授与式は行われなかったとのことです。代わりに登場した友人で歌手のパティ・スミスは、ディランの代表作の一曲を披露しましたが途中で緊張からか、歌が止まるというハプニングがあったこともメディアは伝えておりました。また歌手が、文学賞を授与されることにつき当然、文学界から疑問を呈する声があがりましたが、選考委員会は「文学界では、文句を言う人がいるならば、私は神々が文章を書くことはせずに歌い、踊ってきたことを思い出すように申し上げたい。」と述べ、選考判断に間違いなかったことを強調したようです。何を言っているのか凡人の私には理解不可能であります。

それから、どうでも関係ありませんが、気になる賞金は、800 万スウェーデンクローナ（約 9500 万円）だそうです。所得税は、ノーベル財団からの授与であれば無税だそうです。しかし経済学賞の受賞は、スウェーデン国立銀行からの授与なので税金はかかるそうです。アインシュタインは、奥さんと離婚するときにノーベル賞をとったらその賞金をすべて、慰謝料にすると確約し離婚したそうで、その後本当に受賞し慰謝料としたそうです。

皆様も、状況は、違えども万一、そういう機会があったならば軽口は厳に慎んで頂きたく思います。

6．幹事報告　幹事　山畑 弥生 君

○例会臨時変更のお知らせ
那智勝浦ＲＣ　1月5日（木）→　1月5日（木）
11：30～　熊野那智大社
（初詣例会）
有田ＲＣ　1月12日（木）→　1月12日（木）
18：00～　橘家
（新年例会）

○休会のお知らせ
那智勝浦ＲＣ　12 月 29 日（木）
有田ＲＣ　12 月 29 日（木）　1 月 5 日（木）

7．ロータリー財団の寄付認証

○ポール・ハリス・フェーロー

千賀 知起 君

田岡 郁敏 君

事務所　〒642-0002
海南市日方 1294（海南商工会議所 4F）
TEL:073-483-0801　FAX:073-483-2266
http://www.kainaneast-rc.jp　E-mail：info@kainaneast-rc.jp

８．ゲスト卓話

「私の想う 2640 地区」　坂東　剛 様（高石ＲＣ）

「昔はこうじゃなかった」、今、そんな風に想っています。ロータリー暦 19 年。その約半分 9 年を地区で何らかのお手伝いを致しております。忙しさも増しますが知人も増えました。有り難い事です。「これによって人生が変わった」と言えば大袈裟ですが、それなりの変化は有ったと思います。今日此処に立たせて頂けたのもそのご縁からです。

2640 地区はかつて友愛に満ち溢れる素晴らしい地区であったとお聞き致します。現に私もそれを実感しておりました。それが 6,7 年前から変わり始めました。原因や状況はそれとなく把握しています。何が悪いのか誰が良くなかったのか、これは結論を出せません。だから未だ解決に至っていないのだと思います。「え、去年に解決したんじゃないの？」、なんて声が聞こえてきそうですが、私は解決に至っていないと考えています。仮に二分しているとしたら、ただどちらかの勢力が圧倒的に優勢なだけだと感じます。

ここ数年間、多くの会員が望んだ方向に舵が取れたので、皆がホッとしている状況です。昔は、言いたい事が無かったのでしょうか？又は、言いたい事が有っても我慢出来たのでしょうか？今はどうでしょう？誰もが言いたい時に言いたい事を遠慮なく発言する。それは権利でしょうが、暫し人付き合いを悪化させてしまいます。

今期地区では「中長期委員会」が発足しました。単年度のみならず近未来を見据え、起こりうる問題や様々な改善について提議します。当委員会で纏めた提案を、地区の幹事会等で実行計画に変えていく様なやり方です。しかし此処でも思いが纏まりません。それは各委員のここ数年来の当地区についての経験や知識、それと自身が認識する問題点の違いが有るからです。事実、苦戦しています。こんな少人数が纏まらないのに、二千人近くいる当地区が纏まらないのも当然の様な気がします。せっかくですので中長期委員会の事を少し詳しくお話します。私感を交えながらです。

委員長は、堺中 RC の西谷氏です。福井ガバナーが就任要請されました。委員会発足の提案者も福井ガバナーだったと思います。西谷氏は、「正常化する会」の運営中心メンバーの一人で唯一大阪側 RC のメンバーでした。

誤解を招いてはいけませんので西谷氏と私の関係を先にご説明します。非常に親しい仲でありまして、ロータリーと違う組織で息を合わして共に活動した間柄です。福井ガバナーは、「正常化する会」を無くしたかったのだと思います。そして、地区組織で正当な委員会として立ち上げる事を考えられたのでしょう。メンバー選定は、西谷氏に一任された様です。「正常化する会」で最も活躍された中の一人和歌山南 RC の豊田氏を招きましたし、「正常化する会」に全く無縁の私も招かれました。西谷氏は、会の運営を公平に行う為にと堺の某 RC 会員も招きました。その他公平な対応が期待できる複数名が招かれました。私の強い要望で貴クラブの谷脇氏にもお願い致しました。

会議は月 1 回。堺と和歌山の順繰り。1 回目会議で運営方針を協議するも難航。結論でず、問題点抽出が宿題。2 回目会議で問題点協議するも噛み合わず、とりあえず 1 つずつ検討して行く事となり先ず、最初に「ガバナー選考問題」について協議する事となる。担当 2 名が選ばれ検討資料作りが宿題。3 回目会議で当委員会としての見解を取り纏め、福井ガバナー・山田代表幹事にお預けした。4 回目会議で「地区会計で青少年奉仕について飛び抜けて高い支出が有るがこれはどう言う事か」について質問が飛び交い、次回会議に識者お招きして詳細を伺う事となる。5 回目会議、青少年奉仕委員さんから説明を受け一同納得。次の審議としてガバナー事務所固定化について議論する事となる。6 回目会議で、各クラブへアンケートのお願いする事となる。この委員会は次年度以後も継続するつもりだと聞いていますが、さてどうなるのでしょうか？「正常化する会」時代から囁かれていたらしいガバナー事務所固定化の話、当委員会主導で上手く決着できるのでしょうか？

私は辻ガバナー年度の 2 年間、ガバナー補佐を努めました。当時、「正常化する会」は一丸となって攻めて来ました。全く強固な一枚岩の様でした。貴クラブの谷脇氏と私は、辻陣営の立場で「正常化する会」幹部の岡本・豊田・西谷氏に再三に渡って働き掛けを致しました。

本当の地区正常化へは、こんな事をしいては駄目だと。結果、時間は掛かりましたが今の様になりました。辻ガバナーも相当な苦労をされていました。すぐ傍で見ていてとても気の毒に思う事が多々ありました。何のために地区が在るのか？誰のために地区は在るのか？この答えを求めるつもりはありません。

何の為であっても、誰の為であったとしても我々は大の大人であり選ばれしロータリアンです。お互いを信じ、お互いを頼る事で信頼が築けるのだと思います。地区の再生を大いに期待し、微力ではありますがこれからも応援致したく思います。

９．閉会点鐘

次回例会
第 1901 回　平成 29 年 1 月 6 日(木)
18:30～ マリーナシティホテル
「新春夫婦例会」

Rotary International Convention
HOST ORGANIZATION COMMITTEE

12月は 疾病予防と治療月間です

ニコニコ・BOX

Happy birthday！

12 月のお祝い

☺会員誕生日

９日　阪口 洋一 君　　１６日　田岡 郁敏 君
１７日　寺下　卓 君

☺奥様・旦那様誕生日

２１日　重光 りえ 様　　２３日　宇恵 恭子 様
２７日　中西 尚子 様

☺結婚記念日

６日　前田 克仁 君

☺一般ニコニコ

寺下　卓 君　坂東さん　遠いところようこそお出で下さいました。本日の卓話　よろしくお願いします

上野山 雅也 君　坂東さん　本日は卓話よろしくお願いします。

山畑 弥生 君　〃

大江 久夫 君　〃

谷脇 良樹 君　〃

宮田 敬之佑 君　1900 回例会のうち、1898 回を出席しました。

坂東　剛 様（高石ＲＣ）　本日、卓話宜しくお願いします。

Rotary NEWS

「ポリオのない世界」の実現は、ロータリーの支援の下、パキスタンでポリオを撲滅できるかどうかにかかっています。

パキスタンの町、コハトにある交通量の多い料金所。ここで、3 人のチームが忙しそうにポリオ（小児まひ）ワクチンの投与活動にあたっています。ロータリーの青いベストを着たチームのかたわらには、銃を持って警護する兵士の姿があります。この料金所を通過する車は、東はイスラマバード、西は近くのアフガニスタン国境へ。1 台のバンが、雑然と群がる車の中から離れ、近くに停車しました。チームメンバーの一人がドライバーに何かを尋ね、もう一人のメンバーが冷却容器からワクチンを取り出す準備をしています。ぎゅうぎゅう詰めのバンの中に、一人の子どもがいます。ポリオの予防接種を受けたことのない子です。

議論している時間などありません。車内は人が多すぎてドアまで移動できないため、親戚の一人が子どもを抱えて後部窓から外に出すと、メンバーがその口にすばやく 2 滴のポリオワクチンを投与。予防接種を受けたことが分かるように紫のインクを小指につけ、泣く子どもを窓から車内に戻しました。バンが再び走り出し、車の群れの中へ消えていくと、メンバーは視線をほかの車へと移し、次の子どもを探しはじめました。このような光景は、国内の交通要所で日に何千回と繰り返されます。移動する子どもたちにポリオワクチンを投与できるよう、国中のバス停留所、国境検問所、駐屯地、警察検問所が、即席の予防接種クリニックとなります。

わずか数年前まで、世界のほぼすべてのポリオ症例が、ここパキスタンで報告されていました。ここでは、移動する子どもを見逃さないために、ウイルスに負けずとも劣らない敏速で執拗なまでの予防接種ストラテジーが必要とされます。全国数百カ所で、保健従事者のチームが、予防接種を受けていない子どもを見つけるために目を光らせています。ワクチンの投与は、ファーストフードのドライブスルーよりもてきぱきと、あっという間に行われます。この手早さとは対照的に、予防接種の恩恵は永久に続きます。一人の子ども、一つの家族、一つの世代が、この 2 滴のワクチンで守られるのです。今、パキスタンは、ポリオが完全になくなるまであと一歩のところまで来ています。

グアテマラで教師を育てる

学校に行くだけでは識字率は高まらない。授業改革に乗り出したロータリーのアプローチ。

キャロライン・ジョンソンさん（米国メーン州、ヤーマウス・ロータリークラブ所属）は、グアテマラ中部の山岳部で出会った小学 1 年の担任教師から聞いた言葉にショックを受けました。この教師は、「グアテマラ識字率向上プロジェクト」に参加する以前、生徒たちが読み方を覚えるのは「無理だと思っていた」と言うのです。「その教師はこう言いました。“1 日授業をしなくて済むし、本がもらえ、おいしいランチも出ると聞いたので喜んで研修に参加したけど、心の中ではまったく無駄な試みだと思っていた”」と。

このプロジェクトでは、この教師をはじめとする 100 人以上が、8 カ月にわたり研修を受講。まる暗記や書き取りではなく、子どもの思考力を高める授業の

メソッドを学びました。ジョンソンさんはこう続けます。「その教師は、生徒 50 人中 45 人が読み方を覚え、2 年生に進学できたと興奮気味に語りました。参加した教師の 90 パーセントが、研修の効果を確信するようになりました。教師になってよかったとあらためて実感し、今では何かを変えられると信じて教壇に立っています」。これまで数十年、識字率向上の取り組みといえば、「就学を妨げる要因をなくす」「教材を提供する」など、子どもたちが学校に通うための支援が中心でした。しかし今、専門家の多くは「それでは不十分」と指摘します。生徒の学力を伸ばすには、まず授業で教える側の力を伸ばす必要があるのです。

通学率よりも学習成果を重視

このグアテマラでのプロジェクトや「ネパール教員研修イノベーション（NTTI）」など、ロータリーのプロジェクトは「教える力」を高めることで、子どもたちの読む力を育てています。教員への支援に力を入れているのはロータリーだけではありません。国連や米国国際開発庁（USAID）も、教師への援助を重視した取り組みを行っています。識字能力の向上は、より良い生活を送るための条件であり、「極度の貧困を削減する」という大きな目標に向けた活動の一環でもあるからです。世界銀行のリードエコノミスト、クエンティン・ウォドンさんは、専門家として、またキャピトルヒル・ロータリークラブ（ワシントンＤＣ）のメンバーとして、教育プロジェクトを研究してきました。学習の成果を改善したいなら教師を抜いて考えることはできないと、ウォドンさんは力説します。「子どもたちの学習効果を上げるには、教師の存在に幅広く注目すること」とウォドンさん。教師への研修は、世界銀行が定めた 8 つの主要目標のひとつでもあります（ほかの目標は「教師への期待を明確にする」「優秀な候補者を集める」「教師のスキルを生徒のニーズに合わせる」「教師の基本理念を掲げる」「モニタリングする」「継続的にサポートする」「モチベーションを高める」）。ウォドンさんのクラブは、ネパールのカトマンズ・ロータリークラブと協力して、授業改革に力を入れている NTTI と非政府団体 PHASE を支援しています。これまで授業といえば、生徒たちはただ受け身で座っているだけ。しかし、このプロジェクトで授業の主体となるのは生徒たちです。「これまで慣れてきた授業の方法を変えることは簡単ではないが、教え方を変えようという考え方は徐々に浸透しつつある」と。

こんなエピソードもあります。以前、暗記法ばかりに頼り、黒板の文字を生徒に書き写させるばかりの教師がいました。しかし、研修に参加した後、この教師は生徒が活発に参加できる授業に切り替えました。例えば、生きものとそうでないものを並べ、その違いを生徒が説明したり、ディスカッションしたりすることもありました。そのような授業の後には、全員が外に出て、学んだことを自然の中で体験する演習もしました。この「自然学習」のとき、ある生徒が近寄ってきて、生きたアリを教師の手の上に乗せ、こう尋ねました。「これは生きものだよね」。教師がうなずくと、生徒はそのアリを押しつぶし、また尋ねました。「まだ生きもの？」。ふいをつかれた教師は、ほかの生徒たちに「みんなはどう思う？」と質問。その後は活発な議論がはじまったそうです。ほかの教師も、生徒参加型の授業の効果を実感したと口をそろえます。「授業のやり方ががらりと変わった。研修でいろいろなメソッドを学ぶことができた」と、中学教師のゴマ・カーダさんは話します。

グアテマラでのプロジェクト

キャロライン・ジョンソンさんがカリキュラム作成に携わったグアテマラ識字率向上プロジェクトも、成功している活動のひとつです。活動自体は 20 年前に始まったもので、当初はグアテマラ山岳部の学校にパソコン学習室をつくり、中学生に教科書を配るだけでした。しかし、次第に教師への指導に力を入れるようになりました。

2006 年、地区の識字率向上プロジェクトの実施地を探していたジョンソンさんは、この山岳部を訪れ、生徒たちの読む力が深刻に欠如していることを知りました。この問題を解決できると考えた彼女は、小学校校長の仕事を辞めてこの活動に打ち込むことに。現在はこのプロジェクトのテクニカルアドバイザーを務めています。「私自身、小学校の教師でしたから、中学 1 年から読みを習いはじめるのでは遅すぎるとわかっていました。読みは小学 1 年からでなければなりません」その後 1 年間、数回グアテマラを訪れ、現地の非営利団体、教師、住民、学校関係者と会いました。また、世界各地で広く用いられている「集中言語学習法」を基にカリキュラムをつくり、グアテマラ国内で有名な非営利団体 Cooperative for Education（CoEd）と提携しました。

地元ロータリー会員の援助の下、CoEd が採用した講師 5 人が、約 150 人の小学校教師を対象とする 2 日間の研修を 3 回（1 月、4 月、7 月）実施。授業指導や助言も行いました。このプロジェクトでは、現在も教科書やパソコン学習室の設備を提供しつづけています。パソコン学習室では、生徒たちが週に 1 時間、Windows、Word、Excel といった標準ビジネスソフトを自由に使えます。利用料は学校が集め、CoEd による管理の下、教科書やパソコン機器が古くなったときの新品購入代に使われています。さらに毎年、ロータリー財団から新たなグローバル補助金が支給され、40 ほどの小学校と 12 の中学校に活動が広がっています。こうした活動はいずれも、地元リーダー、親、教師、学校関係者との話し合いに基づいて始められます。これまで、グアテマラ、米国、カナダ、ケイマン諸島、英国、日本の 480 以上のクラブから支援が寄せられており、毎年、約 50 人のロータリーボランティアが教材を届けたり、授業を見学したりしています。研修を修了した教師のほとんどが、学んだことを実践して教育の質を改善しています。「成果が絶対かというと、そうではありません。しかし、大半の教師が学んだアプローチを実際に生かしています」と。